

エンゲルス「国民経済学批判大綱」と 「経済学批判 Kritik der Politischen Oekonomie」

齊藤 彰 一¹⁾

第1章 問題の所在

a) エンゲルス「国民経済学批判大綱」のテーマとは何か？

F. エンゲルスの「国民経済学批判大綱」(以下、「大綱」)の意義を論じようとする場合、いわゆる「マルクス・エンゲルス問題」に対して、何らかの形でふみ込まねばならぬ気分からされる。いわゆる「マルクス・エンゲルス」問題なるものがかまびすしく論じられるなか、そう感じるのは無理からぬことかもしれない。

しかし、我々がこの「大綱」に関心をもつのは、別の理由からである。それは、「大綱」の内容が、資本制生産そのものへの批判であるのか、それとも、その生産様式を様々な範疇(以下、「カテゴリー」と称す)をもって表現している「国民経済学」(あるいは古典派経済学)への批判なのか、という問題を解明することである。言いかえれば、「大綱」が問題にしているのは、資本制生産の生み出す悲惨な諸現象なのか、それとも「国民経済学」のカテゴリーあるいは、そのカテゴリー編制への「批判」なのか、ということである。のちに詳しく述べるが、結論は

1) 国立大学法人岩手大学社会科学系。

2) レーニンが次のように述べている。「エンゲルスは、マルクスとルーゲの『独仏年誌』に「国民経済学批判大綱」を発表して、そのうちで、社会主義の立場から、近代経済制度の基本的諸現象を私的所有の必然的な結果として考察していた」と。この部分は、正確さを欠いていると思われる。後に詳述するが、エンゲルスが「大綱」で考察したのは近代経済制度の諸現象のことではなく、それをすでに考察してカテゴリーを与えた国民経済学そのものである。他方、レーニンが、その直後に次のように述べているのは正しい。「マルクスが経済学—彼の労作によって完全な変革をこうむった科学—を研究する決心を決めるには、エンゲルスとの交際がはずかた力があることは議論の余地がない。」(レーニン「フリードリヒ・エンゲルス」、レーニン全集第二巻、大月書店、p.8)。このレーニンの二種類の評価は、デ・イ・ローゼンベルグの『改訂 初期マルクス経済学説の形成(上巻)』(副島種典訳、大月書店、<Ocherk: raziwitiya ekonomicheskogo ucheniya Marksa i Engelsa v sokorovie godi X IX weke>, Moskwa, 1954g.)においても継承されている。彼は言う。「エンゲルスは、この科学の対象の名称をも、この科学そのものをも、誤解を招くものとして排撃した」(p.70)。

これは正しい。しかし他方で「エンゲルスの偉大な功績は、彼が恐慌をブルジョア社会の基礎中の基礎である私的所有と結びつけたことにある」(p.83)と述べている。ローゼンベルグの著作のなかでは、資本制生産のもたらす現象と、国民経済学への批判が混在している。この点で我々は、有井行夫『マルクスの社会システム理論』(有斐閣、1987年)を参照すべきである。有井は、国民経済学による「法則」の「非歴史的把握」とマルクスによる「概念的把握 begreifen」とを厳密に区別している(p.39)。有井の言葉を使うならば、まさしくエンゲルスの主として「大綱」で行っていることは、概念的把握そのものであり、マルクスもまた、それ以降終始その姿勢に徹していると言っても過言ではない。なお、同様の点については、土屋保夫「エンゲルスの虚像と実像—廣松渉宇治の『エンゲルス論』などの検討—」(『経済』1970年11月)も参考とした。

次のとおりである。「大綱」の眼目は、資本制生産の諸現象への「批判」ではなく、資本制生産に関するカテゴリー、あるいはそのカテゴリーの編制 Griederung であるところの「国民経済学」(古典派経済学)への批判にある²⁾。

b) そもそも「批判 Kritik」の意味は何だろうか？

ところで、ここでまず、我々の根本的な問題意識を紹介しておこうと思う。上記で「批判 Kritik」³⁾という言葉をなにげなく使ったが、そもそも Kritik とは、いかなる意味をもって使われているのか？

たとえば、カール・マルクス『資本論』のドイツ語での名称は、“Das Kapital Kritik der politischen Oekonomie”である。ここでも、「政治経済学の批判 Kritik」⁴⁾という言葉があからさまに用いられている。またこれを分かりやすく解説している文献も見当たらない⁵⁾。「批判」の語は、『資本論』の副題のみならずマルクス主義⁶⁾の文献には必ずと言ってよいほど登場する。

3) 『広辞苑』(第五版)によれば、「批判」とは「(criticism イギリス Kritik ドイツ) ①批評し判定すること。・・・②人物・行為・判断・学説・作品などの価値・能力・正当性・妥当性などを評価すること。否定的内容のものをいう場合が多い。哲学では、特に認識能力の吟味を意味することがある『強い—を浴びる』」(傍線は斎藤による)。辞書の第一義の説明にも関わらず、人口に膾炙している意味としては、「否定的内容」として「強い批判を浴びる」といった具合に使われることが多いようである。哲学での用い方にも言及はしている。問題は、外来語としての「批判」の意味が、日常的場面と哲学の書物のあいだで乖離している、という事実である。学術用語と日常語の意味とが乖離することは、輸入学問である以上、ある程度やむを得ないと言えよう。しかし、学術用語と日常語とを限りなく近づけて行く努力をしなければ、学問の成果は、いつまでたっても、社会に(さまざまな意味で)浸透してゆくことはない。たとえば、「剰余価値」は、『広辞苑』ではマルクスの語義だけが掲載されている。これは喜ぶべきことではなく、悲しむべきことなのである。なぜなら、それは、「剰余価値」が日常用語として使用されていないということの意味するからである。

4) では、19世紀ドイツにおいては、Kritik という言葉は、どのような意味で用いられていたのだろうか？ここでは、“Deutsches Woerterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grim. Fuenfter Bd.K. ”Bearbeitet von Rudolf Hildebrand, Leipzig Verlag von S.Hizel.1873. の必要箇所を提示することにする。「1) 固有の意味としては、芸術や学問の事柄を専門的に判断したり、評価したりする技術のこと。」(S.2334)。この限りでは、一方的に否定的に論難するという意味は見出され得ない。むしろ副次的な意味である。これは現代ドイツ語も同じである。この Kritik は、古代ギリシャ語に起源をもっている(平凡社『哲学事典』より)。“Woerterbuch altgriechisch-deutsch”の必要箇所を示す。「κρίνω, 1) scheiden, trennen, sondern, sichten; auch = ordnen. Daher auswählen, die Besten aussondern; auch im med., κρίνασθαι ἀρίστους, sich die Besten auslesen; τὸ ἀλ, θεῖς τε καὶ μὴ, das Wahre vom Falschen unterscheiden. Daher 2) Streitigkeiten entscheiden, schlichten, den Ausschlag geben」見られるように、「区別する」、「引き離す」、「選りわけるといった語義から、「整理する」あるいは「整える」といった意味まで存在する。あるいは、「争いごとに判決をくだす」といった意味までである。こうした語義は、ドイツ観念論哲学に影響を与えることになる。ドイツ観念論がこの語義を意識しながら哲学の仕事に携わった場合、それは「観念を吟味する」といった意味で用いられるであろう。有名な例証としては、「純粹理性の批判」であって、これはもちろん、理性を吟味して、その能力の限界を明らかにすることを目的としている。なお、κρίνωの調査は、<http://www.operone.de/griech/wadirhalt.html> に拠った。資料的制約とはいえ、電子媒体を用いざるを得なかったこと、慙愧の念に堪えぬ。

5) 大石高久『マルクス全体像の解明』(八朔社、1997年)は、マルクスによる「批判」の作業を通じて、マルクス主義の全体像の把握を図った労作である。そして、マルクスによる古典派経済学への批判についても大いに論じられている。大石は、その著作の第3章において、見田石介を引いて、「経済学批判」とは、経済学的カテゴリーを分析的・歴史的視点から欠いて把握している点への批判であると述べている。見田石介の学説については、別稿で論ずる予定である。この「批判」は、「吟味」という言葉に近い意味で用いられている。しかし、「吟味」の含意にまで考察が及んでいないため、この書の説明がわかりにくくなっていると考えるのは、私だけであろうか？

これをなおざりにしてよいはずはない。まずは、この点を考えてみる。マルクスによるラサール宛（1958年2月22日付）の手紙のなかでは、「さしあたり問題になるのは、経済学的諸カテゴリーの批判だ。言いかえるならば、ブルジョア経済学の体系を批判的に叙述することだと言ってもよい。それは同時に体系の叙述でもあり、また叙述による体系への批判である。これは政治経済学体系への批判であるとともに、体系による政治経済学でもある」⁷⁾と述べている。つうじょう、私たちが「批判」という日本語を使用する場合、それは一方的な「非難」あるいは「論難」のことを意味する場合が多い。しかし、Kritik をその意味に解釈してしまうと、『資本論』は、既存の経済学への一方的な論難の書ということになり、経済学の体系という意味は失われてしまう。だから、我々は、この Kritik の本来の意味を調べ直してみようと思うのだ。

G.W.H. ヘーゲルは、哲学そのものを批判することについて、次のように述べている。長くなるが、そのまま引用する。

「批判は、芸術または学問の分野で行われるものだが、ひとつの尺度が要請される。その尺度は、批評家や批評される者からも独立したものでなくてはならない。個々の表象、また表象の特殊性ではなく、永遠不変の、物そのものの理想型から得られた尺度が要請される。美しい芸術の理念を、芸術批判によって作りだしたり発明したりすることはできない。それは前提されるのである。同様に、哲学的批判においては、哲学そのものの理念が条件であり前提となる。それなくしては、いついつまでも主観と主観との対立が続くばかりであり、制約されたものと絶対的なものとが対置されることはない。」（傍線は齊藤による）⁸⁾

上記で言われているように、批判 Kritik というものは、ある体系が内在的な運動によって行うところのものである。しかし、ここにヘーゲルによる弁証法の神秘化が看取される。自然的・物質的なシステムそのものが自らの「批判」（否定）を通して、成長・発展してゆくというのは自然科学の正しく教えるところである。しかし、テキストを批判する、あるいはカテゴリーを批判するといった場合、ヘーゲルの規定をそのまま適用することはできない。カテゴリーは、放っておいても、勝手に発展してくれることなどないのだから。

したがって、テキストやカテゴリーを批判すると言った場合、人間の頭脳が、あらかじめ、批判されるカテゴリーないし体系のありうべき姿を想定して、Kritik を行うという意味になる。したがって、カテゴリーそのものではなく、人間の頭脳がカテゴリーの Kritik を行うという場合、それは、既存のカテゴリーを「吟味」するというやり方をとるということになる。つまり、そのカテゴリーの意味をさらに掘り下げ、再定義をし、そしてカテゴリーの「吟味 Kritik」を行い、論理的発展をはかる。そしてカテゴリー同士の編制を作り上げる。その結果として新しい

6) ここで「マルクス主義」の文献・言説という言葉が含意するところは、マルクス、エンゲルスのみならず、現代の後継者たちまでの文献・言説を総じて指す。「科学的社会主義」という言葉もあるが、これは誤解をともなう概念である。原語では、wissenschaftliche Sozialismus であり、佐々木力が指摘するように「学問的社会主義」が正しい。しかし、この語もまた人口に膾炙しているとは言い難い。したがって、ここでは便宜的に「マルクス主義」の言葉を用いること、やむなきを得ない。

7) MEW, Bd. 29, S. 550.

8) ヘーゲル「哲学的批判一般の本質」“Ueber das Wesen der philosophischen Kritik überhaupt, und Ihr Verhaettniss zum gegenwaertigen Zustand der philosophie insbesondere.” (G.W.F. Hegel Gesammelte werke Herausgegeben im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Bd. 4, Felix Meiner Verlag, Hamburg, S. 117.)

体系が出来上がるということになる⁹⁾。これが、上記ラサール宛て書簡の意味である。体系による批判は、同時に批判による体系への批判となるゆえんである。

c) 『資本論』の新しさとは何か？

ここで、問題をより広くとらえるために、次のような思潮が存在していることを確認しておく。それは、『資本論』のなかに独自の哲学は含まれているだろうか？というものである¹⁰⁾。例えば、マルクス主義の哲学は、『ドイツ・イデオロギー』（1845年）の段階にて、完成をみたとされている。『ドイツ・イデオロギー』は、イデオロギーなかんづく当時ドイツで支配的であった青年ヘーゲル派を論難しがてら、イデオロギーの歴史的・社会的および物質的基礎一般について論じたものである。

ところで、平子友長『社会主義と現代世界』によれば、『ドイツ・イデオロギー』には、かねてから、マルクス主義の新しい哲学は存在しない、と結論されている。その書にいわく、『資本論』の段階においては、『ドイツ・イデオロギー』を乗り越えるような哲学は存在しない。哲学はなるほど『資本論』のなかに含まれているが、それは『ドイツ・イデオロギー』の内容を補完するものでしかないと述べる。いわゆる物象化論や、あるいはアルチュセールの主張するような構造主義は存在しないと切り切る。否、正確に言えば、そうした哲学を『資本論』のなかに見出しうる可能性はあるかもしれないが、しかし、それはマルクスの意識したところではない、と。

結論からいえば、これは、問い自体が間違っている。新しい内容を探そうとする方向が間違っている。『資本論』にはマルクスが達し得た新しい哲学の「境地」とも呼ぶうるものがある。そしてマルクス自身、それを意識していた。それを、便宜的にこう名付けておく。そこには、マルクスによる「科学革命」である、と¹¹⁾。それを最初に発見したのはエンゲルスである。

9) なお「経済学批判」の意味について、中川弘は次のように述べている。「私的所有の本質把握におけるマルクス・エンゲルスの『基礎視角』の異同、『歴史の説明原理』としての『自己疎外』論の受容と超克における両者の異同という、なお立ち入って論ずるべき問題を残しつつも、『大綱』は、すくなくとも唯物論的立場からのブルジョア社会の経済学的分析＝「国民経済学」批判の先駆の役割を果たし、『科学的共産主義』を定礎するたしかな大きな一歩を記した論稿、と意義づけうるモニュメンタルな労作といつてよい」（『資本論体系1 資本論体系の成立』p.253）。

10) これは平子友長『社会主義と現代世界』（青木書店、1991年）において、提起された問題である。その書にいわく、マルクス主義の哲学は『ドイツ・イデオロギー』で終わった。『ドイツ・イデオロギー』では、生産様式が生産力と生産関係で成り立っているということは記述されているが、生産力主義が貫かれ、生産関係が生産力に及ぼす影響のことは指摘されていない、と。この点に関しては、その通りである。平子氏が後に報告したところによれば、生産関係が生産力に影響を及ぼすという内容は、『資本論』に見出されるという。それは、かの「形式的・実質的包摂」（第一部第5篇）のくだりである、と。したがって、『資本論』は、『ドイツ・イデオロギー』をこえることはなく、むしろそれを補完する哲学しか有しないということになる。氏の学説を書誌学的な観点から批判することはたやすい。なぜなら、フランス語版『資本論』では、その部分は削除され、マルクスの遺志は、その削除の方針を曲げていないからである。しかし、氏の学説についてもっとも疑義を抱くのは、問題の提起そのものが間違っているのではないかとということである。『資本論』の新しさとは何か、という問題は、誰しもが考えることである。しかし、その問題を『資本論』の新しい内容を求めるという方向に求めるのは、間違っている。結論を急ぐようだが、『資本論』の新しさは、その内容そのものにあるのではなく、諸内容・諸カテゴリーの新しい編制（Gliederung）にあるのだ。なお、平子氏の上記に関する報告は、『研究成果報告書 デジタル化によるマルクス経済学の総合索引システムの構築』（研究代表者・守健二、独立行政法人学術振興会、科学研究費補助金（基盤研究B）18330037）の第14章「新MEGA第IV部門が切り開くマルクス研究の新局面」として収録されている。

d) エンゲルスの「科学革命」論

エンゲルスは、『資本論』第一巻の完成をもって、それを「科学革命」とは呼んでいない¹²⁾。しかし、『資本論』第二部序文に書かれた剰余価値論と、化学者ラヴォアジエの業績との比較は、『資本論』の学問上の「革命的」性格を雄弁に語っていないだろうか？また英語版『資本論』への序文にも、その科学革命上の意義を明確に述べている箇所がある。「新しい科学上の発見は、新しい述語の革命を含んでいる」（『資本論』第1部、英語版序文）。

『資本論』第二巻への序文の内容とは、次のようなものである。これは、ロートベルトゥスが、マルクスが剰余価値論に対して先取り権を主張した件について反駁を述べたものである。ロートベルトゥスは、「賃料 Rent」という名称をもって、マルクスの「剰余価値」概念なるものを先に発見したと主張していた。しかし、エンゲルスは化学上の革命、ラヴォアジエによる酸素の発見をくだりを挙げて、ロートベルトゥスの科学的業績なるものを否定する

アルチュセールが『資本論』第一部の労賃論のなかに、いわゆる「徴候的な読み方」を発見した業績もまた、エンゲルスの判断に連なるものと言えよう。

さて、こうした一連の評価、特にエンゲルスの評価が、『資本論』の科学上の革命を指し示していることは明らかである。しかし、問題は次の点にある。果たして執筆者マルクス自身が、『資本論』を意識的に科学革命ととらえていたのかどうか、ということである。

e) マルクスによる経済学的カテゴリーの批判 (Kritik) の一例証

『資本論』において、経済学的諸カテゴリーの批判が明確に述べられているのは、次の部分である。

「古典派経済学の根本欠陥の一つは、商品の、また特に商品価値の分析から、価値をまさに交換価値にするところの価値の形態を見つけ出すことに成功しなかったということである。A・スミスやリカードのような、まさにその最良の代表者においてさえ、古典派経済学は価値形態を、まったくどうでもよいものとして、または商品そのものの本性にとっては外的なものとして取り扱っているのである。その原因は、価値量の分析にすっかり注意を奪われていたというだけではない。それはもっと深いところにある。」¹³⁾

マルクスは、まず上のように前置きしたうえで、次のように述べている。

「労働生産物の価値形態は、ブルジョアの生産様式の最も抽象的な形態であって、これによっ

11) なお、『資本論体系1 資本論体系の成立』（有斐閣、服部文男・佐藤金三郎編、2000年）正木八郎氏が『資本論』の「科学革命」としての性格について言及している（p.81-103）。氏の言われるように、資本論の「経済学批判」としての意義または意味を考察するためには、ルイ・アルチュセールに学ぶことは必要である。ただ、言い添えるならば、「科学革命」とはもともと（自然）科学史の用語であり、自然科学の発展過程の革命的性格をあらかじめ十分把握しておかねば、『資本論』の学問としての革命的意義は具体的に解明され得ないだろう。なお、この点で先鞭をつけたのは、『資本論』第二部序文で、ラヴォアジエの化学的業績に言及したエンゲルスである。

12) なお「科学革命」という言葉はもともと歴史学の用語として生まれた。が、それが人口に膾炙するようになったのは、トーマス・クーン『科学革命の構造 The Structure of Scientific Revolutions』からである。

13) MEGA II/5.S43.

てこの生産様式は、社会的生産の特殊な一種類として、したがってまた同時に歴史的に特徴づけられているのである。それゆえ、この生産様式を社会的生産の永遠の自然形態と見誤るならば、必然的にまた、価値形態の、したがって商品形態の、さらに発展しては独自性をも見のがすことになるのである。」¹⁴⁾

資本制生産（商品生産）の特徴は、社会的生産をば、各個独立した商品生産者が無政府的に担うという点にある。しかし、無政府的生産といえど、それは社会的生産の一形態であることに変わりはないのだから、生産物は必ず商品となる。つまり、当初から売買を目的とした生産物となる。しかし、古典派経済学が、資本制生産を永遠不変のものとする限り、彼らが自分たちの時代を無政府的生産が支配的な特殊な社会的段階であると意識することはない。その社会の特殊性を意識することはない。したがって、彼らにとっては、単なる生産物と商品（形態）との区別は存在しない。それらは混同されている。したがって、彼らは、生産物の交換関係に考察を及ぼすことはない。彼らが考察するのは、まずもって、価値の量、あるいはその実体である労働の量を確定することである。価値を、交換価値あるいは価値形態として把握しようという問いは出てこない。

マルクスは、価値というカテゴリーを、古典派とともに、いっけん共有している。しかし、古典派がそのカテゴリーもっぱら量的な側面から、つまり生産物に含まれる労働の量からしか考察してないのにたいし、マルクスはそのカテゴリーを歴史的な観点から吟味 Kritikしている¹⁵⁾。この吟味という作業と、カテゴリーの再編制こそが、「経済学批判」と呼ばれるものであり、『資本論』が経済学における「科学革命」をなしたゆえんである¹⁶⁾。つまりマルクスは、この箇所、古典派のカテゴリーが歴史的・社会的観点からの吟味を欠いていると述べているのである。

化学者ラヴォアジエの例証を引き合いに出すことを許していただきたい。ラヴォアジエの名著『化学原論』が世に出たのは1789年である。この科学的業績は、元素および化学反応を定量的に把握するという観点からもたらされたものである。酸素の発見に関して言うならば、それまで支配的であったのは、シュタールのフロギストン説であった。やがて1772年にラザフォードが窒素に該当する物質を、同年シェーレが酸素に該当する物質を抽出する。ついで1777年に、かのラヴォアジエが燃焼による質量の増加という定量的な分析方法を確立する。燃焼による質量の増加という現象は、フロギストン説では説明がつかない。むろん、シュタールの当時から、

14) MEGA II/5.S43-44.

15) マルクスが古典派経済学の「価値」というカテゴリーを吟味したやり方は、アルチュセールが、『資本論』第一部「労賃」において見出した「徴候的読解」とどの程度似ているだろうか？アルチュセールは、古典派が「労働力の価値または価格」というカテゴリーを見いだせなかったために、「労働の価値」の定義をめぐって迷走するさまが描かれていると述べている。あたかも、マルクスが精神分析医となって、クライアントである「古典派経済学者」たちを診察するように。彼ら（古典派経済学）が決定的な言葉を意識化することができないために、その言葉の周辺だけを話しているように。そしてマルクスが隔靴搔痒の思いを持って、古典派のそのありさまを「読」んでいるかのごとくに。同様に、古典派経済学はまた、商品生産者たちが、私有財産制度のもとで商品を生産している歴史的洞察を欠き、そのために、生産物（商品）が交換価値という形態をとることを見ず、それによって、価値形態の見落としが生じている。その意味では、アルチュセールがマルクスに見出した「徴候的読解」の方法は、労賃論のみならず価値論にも見出されると言っても不適切ではない。

16) なおエンゲルスは、マルクスの葬儀で、マルクスの歴史法則の発見は、ダーウィンの進化論の発見の価値に比肩すると述べている。

その現象は観察されてはいた。が、当時は、アリストテレス流の（量的分析ではなく）性質上の分析が主流であったため、その現象はフロギストン説をひっくりかえすには至らなかったのである。ラヴォアジエによる定量分析の確立こそ、フロギストン説を転覆させ、新しい化学を産んだ方法だったのである¹⁷⁾。

同様のことは、マルクスの歴史的・社会的な観点（方法）からする商品分析にもあてはまる。古典派はこの観点を欠いていたために、価値形態を見損ねたのである。マルクスが「古典派経済学の根本的な欠陥」の「もっと深い理由」として、その観点の欠如を挙げていることは、まさしく、彼が古典派と自分との大きな溝を意識していたからにはかならない。マルクスはなるほど、自分の科学的業績を「科学革命」とは呼んでいない。しかし、彼らから飛躍した地点に自分がいることは、十分に分かっているのである。それゆえ、マルクスは、自分の科学的発見の「革命的」性格を十分に理解していたのである。

第二章 マルクスは「経済学批判」の方法をいつ得たか？

第1節 エンゲルス「国民経済学批判大綱」の分析

マルクスの口から経済学的カテゴリーの批判という言葉が飛び出したのは、『経済学批判』における次の文言においてである。「フリードリヒ・エンゲルスと私は、経済的諸範疇の批判のための彼の天才的なスケッチが（『独仏年誌』に）現われて以来、たえず手紙で意見をとりかわしつづけていたが、私と同じ結論に達していた」。この「天才的なスケッチ」とは、若きエンゲルスの「国民経済学批判大綱」のことを指す。

ここでまず行うべきことはふたつである。第一に、この「大綱」において、いかなる経済学的カテゴリーの批判が行われていたか、ということである。第二に、このカテゴリー批判の方法を、マルクスはどのように吸収し、わがものとしていったか、ということである¹⁸⁾。

以下、エンゲルスの用いたカテゴリーおよび引用について、ひとつひとつ注釈を付す。

「国民経済学」

「商人の相互の嫉視と貪欲から生まれたこの国民経済学すなわち致富学は、醜悪きわまる利己心の刻印を額につけている。」¹⁹⁾

エンゲルスはこの「大綱」を書いた時点では、まだ空想的な社会主義の段階にとどまっている。つまり、資本制経済の悪しき諸現象に道徳的な憤慨を覚えている。したがって、国民経済学なるものを単なる「致富学」と蔑視するのである。

「重商主義」

「資本は流通していればたえず増殖するが、金庫に入っていれば死んだものだ、ということ

17) なお、ラヴォアジエの化学的業績については、近著で詳細に述べるつもりであるが、参考として『理科年表』、および『科学史年表』（小山慶太、中公新書、2003年）を用いた。

18) この「大綱」のわかりやすい解説としては、不破哲三『エンゲルスと「資本論」(上)』がある。特に、p.29-36。

19) MEGA, I /3,S.467.

理解したのである。そこで、人々はいっそう博愛的になり、別の金貨をもってかえらせるためには、自分の金貨をおとりとして送った。」²⁰⁾

国民経済学の始まりは重商主義である。これは人々を単なる吝嗇家から「博愛」主義者に変えたのだと述べている。「博愛」とは、貨幣をためこむことではなく、与えることである。もちろんその博愛精神は、より多くの貨幣が戻ってくることを期待したうえでのことである。

「私的所有」

「革命の世紀である18世紀は、経済学をも変革した。だが、この世紀の革命がすべて一面的で対立におちいったままであったように、《中略》経済学は、私的所有の正当性をうたがってみようとは夢にも思わなかった。だから新しい経済学は、半歩前進にすぎなかった。それは、自分がまきこまれた矛盾をおおいかくすために、またその前提にうながされて達した結論ではなく、同世紀の人道的精神にうながされて達した結論をくだすために、自分自身の前提を裏切ってこれを否認し、詭弁と偽善に助けを求めなくてはならなかった。こうして、経済学は、博愛的性格を帯びるようになった。それは、自分の行為を生産者から引き上げて、消費者にふりむけた。それは重商主義の残酷な恐ろしさに信心深い嫌悪をいだいているようによそおい、商業は個人間の場合にも国民間の場合にも友誼と結合のきずなであると宣言した。」²¹⁾

重商主義の目的は、貨幣の形での貿易黒字を増やすことである。貨幣を唯一の富だとみなすかぎり、貿易とは他国からの強奪だということになる。変革された新しい経済学は、重商主義を否定し、私的所有にもとづく商業を礼賛した。なぜなら、商業は、私的所有にもとづくかぎり、強奪ではなく等価交換の形をとるからであり、それゆえに博愛の時代にふさわしい行為であるとみなし得たからである。

「経済学」

「経済学は私的所有の正当性をうたがってみようとは夢にも思わなかった。・・・こうして経済学は、博愛的精神をおびるようになった。それは、自分の行為を生産者から引き上げて、消費者にふりむけた。」²²⁾

経済学は、その博愛精神を正当化した。商人は、消費者に商品を与えるという点において「博愛」的である。したがって、経済学は商人を博愛家として正当化しようとする。むろん、その商人の博愛とは、利潤を期待したうえの偽善のことである。

「マルサスの人口理論」

「この理論は、かつて存在したもののなかで、もっとも粗野で野蛮な体系であり、人間愛とか世界市民とかいったあの美辞麗句をすべて打ち倒した絶望の体系であった。」²³⁾

20) Ebenda, S. 467.

21) Ebenda, S. 468-471.

22) Ebenda, S. 471.

23) Ebenda, S. 471.

経済学が、資本制経済の発展を進歩とみなすようになると、その反対者としてマルサスの人口理論が現れてくる。ここでマルサスが持ち出された理由は、その学説の誤りを指摘するためではなく、経済学の、偽善と化した博愛精神の反対者として登場させるためである。したがって、偽善の学問としての経済学に対して、マルサス理論が現れるのは、必然のなりゆきだったのである。

「スミスの学説」「新経済学者」「リカードゥ以降の経済学者」

「もちろんそれは進歩であった。しかも必然的な進歩であった。独占と通商制限とを伴った重商主義が打ち倒されたのは必然的であって、それによって私的所有の真の諸結果が明みになることができた。・・・私的所有の理論が純経験的な、単に即物的な研究方法を捨てて、いっそう科学的な性格をとるようになり、この性格が理論に、結論にたいする責任をもとらせ、これによって問題を一般人間的な分野に移し替えたのは必然的であった。」²⁴⁾

「結論はすべて出され、矛盾は十分明瞭であった。しかしそれにもかかわらず、彼らは、諸前提を検討するには至らなかったし、しかも依然として全体系にたいする責任を負っていたのである。現代に近づけば近づくほど、経済学者はますます誠実さから遠ざかる。時代が前進するたびに経済学を時勢に遅れないようにしようとして、必然的に詭弁がますますはなはだしくなる。だから、たとえばリカードゥはアダム・スミスよりも罪が重く、マカロックとミルはリカードゥよりも罪が重いのである」。²⁵⁾

スミスやリカードゥ（およびマカロック）といった経済学者は、私的所有という前提を疑うことはなかった。むしろそれを当然の前提として、重商主義という誤った学説を打ち倒すのに貢献した。しかし、スミス以降の経済学は、私的所有のもたらす悪しき諸現象が明みになるに比例して、なおいっそう、私的所有を弁護しなくてはならなかった。したがって、経済学は、スミス以降、発展すればするほど「罪が重い」のである。

「自由主義経済学」

「自由主義経済学のなしとげた唯一の積極的な進歩は、私的所有の諸法則を展開したことである。これらの法則は、まだ最後の帰結に達するまでは展開されず、はっきり述べられはしなかったとはいえ、たしかに、自由主義経済学のなかに含まれている。そこで富裕になるもっとも手近な方法の決定が問題になるあらゆる点では、したがってすべての厳密な経済学的な論争では、自由貿易の擁護者のほうが正しいということになる。いうまでもなく、これは、独占論者と論争する場合のことであって、私的所有の反対者と論争する場合のことでない。なぜなら、イギリスの社会主義者が実践的にも理論的にも証明しているように、私的所有の反対者は経済学上の諸問題を経済学的にもいっそう正しく解決することができるからである。」²⁶⁾

スミス以降の経済学は、重商主義と闘う場合には、正しい。しかし、社会主義者と論争する場合には、旗色が悪い。なぜなら、私的所有という制度を神聖不可侵のものとして疑うことを、

24) Ebenda, S. 471.

25) Ebenda, S. 471-72.

26) Ebenda, S. 472-73.

自らに対して禁じ、それゆえに詭弁によって体系が構築されていたからである。

「商業」

「私的所有の最初の結果は、商業、すなわち相互の必要物を交換すること、つまり売買である」
 「たとえば商業の第一の原則は、寡黙であり、その商品の価格を引き下げおそれのあることをすべてかくしておくことである。その結果、商業では、相手方の不案内や信頼をできるだけ利用すること、同様にまた、自分の商品のありもしない特性を吹聴することが許される。一言でいえば商業は合法的な詐欺である。」²⁷⁾

商業に誠実さをもちこもうとすれば、その商人は没落する。したがって、不誠実さこそが、商業の美德なのだ。しかし、商人のこのような態度は、商品の自然な（あるいは妥当な）価格はいくらか？という問いを提起する。したがって、「価値とは何か」という問題が経済学のなかに持ち込まれる。

「価値」

「商業によって条件づけられる第一のカテゴリーは、価値である。このカテゴリーについては、他のすべてのカテゴリーについてと同様に、新旧の経済学者のあいだにはなんの論争もない。」²⁸⁾

重商主義者は価値を問題にせず、商品の価格のみを問題にした。そして、後に述べるように、新しい経済学者たちも、価値を問題にせず、価格のみを問題にした²⁹⁾。

「抽象的または現実的な価値と、交換価値」

(den abstrakten oder realen Werth, und den Tauschwerth)

「現実価値の本質については、生産費を現実価値の表現としたイギリス人と、この価値を物の効用によってはかることを主張したフランス人セイとのあいだに、長い論争があった。この論争は、今世紀のはじめ以来つづいてきたが、そのままになってしまっていて、解決されていない。経済学者はなにも解決することができないのである。」³⁰⁾ 「競争が問題にされなくなると、生産者とその商品をちょうどその生産費で販売するなんの保障もなくなるということを、経済学者はいったい全然考慮にいれないのであろうか？なんという混乱だろう？／・・・かりに、ある人物が絶大な努力と莫大な費用とをかけて、なんの役にも立たないもの・・・を作ったとしよう。そういうものもまた生産費にだけの価値があるだろうか？全然ない、だれがそれを買いたがるだろうか、と経済学者はいう。したがってわれわれは不評判のセイの効用 Brauchbarkeit ばかりでなく、さらに・・・競争関係をも同時にあわせもつことになる。すなわち経済学者は、自分の抽象を一瞬間も維持してゆくことができないのである。彼が苦勞して遠ざけようとしているもの、すなわち競争だけでなく、彼が攻撃しようとしているもの、すなわ

27) Ebenda, S. 473.

28) Ebenda, S. 475.

29) もちろん、これは当時のエンゲルスの理解であって、ウィリアム・ベティ以降、スミスらは、「自然価格」という名称で、実質的に商品の価値を考察していたのである。

30) MEGA I /3, S. 475.

ち効用もまた、どの瞬間にもこっそり入り込んでくる。抽象価値とその生産費による規定とは、まさに抽象、実在しないものにすぎない。」³¹⁾

ここでエンゲルスが問題にしているのは、「労働価値説」と「効用価値説」のどちらが正しいか、ということでは、無論ない。エンゲルスは、もともとそんなことは問題にしていない。彼が問題にしているのは、労働価値説（生産費説）を護持しようとする、理屈はしぜん効用価値説を招き寄せる、ということだけである。

「この混乱を解明してみよう。物の価値は、両要素を含んでいるのに、これらの要素は、論争の当事者によってむりやりに分離され、しかもわれわれがみたように、それが不成功に終わっているのである。価値とは、生産費と効用の関係である。」³²⁾

上記引用でもわかるように、生産費説と効用価値説のどちらが正しいか、ということ、エンゲルスは問題にしていない。たしかに「物の価値は両方を含んでいる」³³⁾という言い方は、エンゲルス自身の判断である。古典派経済学の判断ではない。そういう意味で、カテゴリー批判という眼目から外れているように見える。しかし、行論はその判断を覆すであろう。

「二つの物の生産費が等しいなら、それらの物の比較上の価値をきめるために決定的な契機となるものは、効用であろう。／この基礎は交換のただ一つ正しい基礎である。だが、この基礎から出発するとすれば、だれが物の効用を決めるのか？関係者の意見だけなのか？そうなければいずれにせよ、そのなかの誰かが欺かれる。それとも、関係者とはかかわりなく、物の固有の効用にもとづいていて、かれらには分明でない規定が決定するのか？その場合には交換は強制によってのみ成立し、各人は自分が欺かれたと考える。物の実際の固有な効用とこの効用とのこの対立、効用の規定とこの対立、効用の規定と交換者の自由とのこの対立は、私的所有を廃止せずには廃棄することはできない。だが、私的所有が廃棄されるやいなや、いま存在しているような交換を論じることはできなくなる。」³⁴⁾

効用によって価値が決定されるという理屈を通せば、交換者同士での詐欺もしくは強奪によっ

31) Ebenda, S.475-76.

32) Ebenda, S.477.

33) 『資本論』の高みから見れば、価値は使用価値（効用か）と価値との結合体である。その観点からすれば、「価値が両方の要素を含」むという言い方はおかしい。しかし、何度も言うように、ここでエンゲルスの目的は、諸カテゴリーの関係の模索である。そしてマルクスもまた、その点に感銘を受けて、経済学批判体系の完成へと向かうのである。なお、杉原四郎『マルクス経済学の形成』（未来社、1964年）では、次のように述べられている。すなわち「大綱」が、「資本主義経済の矛盾の根源を私有財産制という基本的関係にまで掘り下げるとともに、その矛盾の展開と止揚の方向とを生産力の発展とからわしめて追跡することによって、資本主義的経済現象とその相互関連を歴史的必然的なものとして全機構的に把握するという社会主義経済学の基本視角に立った経済学の骨組みを、はじめて実地にえがいて見せたという画期的な功績」（p.48）をもっていると述べている。これは正しいのだろうか？この見方からすれば、『資本論』は、経済学批判ではなく、「経済学原理」の一種であるということになるし、また、その「経済学原理」としての『資本論』のはじまりは「大綱」にある、ということになる。そうではなく、経済学批判という方法をはじめて示したのが「大綱」という文書なのであり、「画期的な功績」は、まさにその点にあるのである。

34) MEGA I/3, S.477.

て利潤を得る、という結論に導かれざるを得なくなる。このような社会は私的所有の存在しない社会である。したがって、効用による価値規定を貫徹すれば、私的所有という前提そのものが崩壊してしまう。

「・・・価値概念を実際に適用することは、ますます生産について決定を下すことに限られるようになるであろう。そしてこれこそ価値概念の本来の分野なのである。」³⁵⁾

この部分は、むしろ、エンゲルスが生産部面において価値の根拠を見出そうとする意思を示している。しかし、投下労働価値説への到達という結論に傾いているわけではない。なぜか？それは、この「大綱」というテキストが、結論としての労働価値説に到達することを目的とするものではなく、むしろカテゴリーへの批判（吟味）を目的とする方向へと、エンゲルスの思考を促しているからである。

「だが、いま事態はどうか？すでに見たように価値概念はむりやり引きさかれて、個々の側面がいずれも全体であるといふふらされている。競争によってはじめから歪められた生産費が価値そのものとみなされなければならないし、同様に単なる主観的効用もそうみなされなければならない。・・・これらのかたわな定義を助け起こすには、どの場合にも競争を考慮しなければならない。」³⁶⁾

「・・・最も興味のあることは、イギリス人にとっては生産費に対して競争が効用の代わりをし、反対にセイの場合には、効用に対して、競争が生産費をもちこむ、ということである。だがなんとという効用、なんとという生産費を競争はもちこむことだろう！競争のもちこむ効用は偶然や流行や富者の気まぐれに左右され、競争のもちこむ生産費は重要と供給の関係に応じて上下するのである。」³⁷⁾

生産費説も効用説も、価格の水準の規定としては不十分であるとエンゲルスは言う。したがって、両者は、その不十分さを「競争」という概念によって解決をはかろうとするのだという。

「ところで、価格が生産費と競争との交互作用によって決定されるということは、まったく正しいことであって、私的所有の基本法則である。これは経済学者が発見した第一の法則であり、純経験的な法則であった。ついで彼は、彼の現実価値を、すなわち、競争関係が均衡し、需要と供給の関係が一致したときの価格を、ここから抽象した。—そうすると当然、生産費があとに残る。そしてこれを経済学者は現実価値と呼んでいるが、それは価格の一規定性にすぎない。だが、経済学では万事がこのように逆立ちしているのであって、本源的なものであり、価格の源泉である価値が、それ自身の産物である価格に従属させられているのである。」³⁸⁾

イギリスの経済学者が、生産費と競争によって価格を説明しようとしたのは、正しいことだっ

35) Ebenda, S.477.

36) Ebenda, S.477.

37) Ebenda, S.477.

38) MEGA I /3, S.478.

たと、エンゲルスは言う。しかし、問題なのは、最初は「価値」を問題にしていたのに、いつのまにか「価格」を問題にしまったということであった。この問題のすり替えによって、懸案は解決されたかのように見える。しかし、それは、価格を本源的なものとし、価値を従属的なものとする転倒を介してのことであった。

価値のカテゴリーに限って要約をするならば、それは次のごとくである。

「商業」が、「価値」という概念を否応なく経済学者たちに意識させた。しかし、その「価値」の実体をめぐって、論争が始まった。イギリスの古典派経済学は、それを「生産費」にもとづくものと考えた。しかし、大陸の経済学者 J. B. セイはそれを「効用」であると考えた。だが、どちらの考えも説得的ではなかった。そこで、両者とも「競争」という概念をやむなく持ち出して、理論を補完しなくてはならなかった。イギリスの古典派経済学は、経験的な推察から、生産費を「価値」の実体とした。そのやり方は、商品価格の上下運動から競争を捨象する。つまり、需要と供給が一致する理想的な状態を想定する。かくして出てきたものは、「生産費」という「価格」なのであるが、古典派はそれを「価値」と規定したのである。このやり方は、価格から価値を抽出するというものである。本来ならば価値から価格が導かれなければならない。したがってイギリスの古典学派の考え方は、転倒している、と。

以上、要約したごとく「大綱」の眼目は資本制生産のもたらす悲惨な諸現象への論難ではなく、その生産様式をカテゴリーをもって組み合わせる表現した経済学への批判 Kritik である。

むしろ、「大綱」には、私的所有の制度がもたらす諸現象、たとえば恐慌といった現象も分析されている。しかし主眼はあくまでも資本主義的生産様式にまつわるカテゴリー批判なのである。

第二節 マルクスは「大綱」をどのように読んだか？

マルクスが書簡において、当時「大綱」について述べたものは、残っていない。が、マルクスじしんは「大綱」を熱心に研究する。下記に引用したものは、マルクスが「大綱」について記したノート（摘要）である。

「私的所有。その最初の結果は商業であり、すべての活動と同じように、商業を営む者にとっては収益の直接の源泉である。商業によって条件づけられる第一のカテゴリーは価値である。抽象的な現実・交換価値³⁹⁾。セイは、現実価値を効用によって決め、リカードゥとミル⁴⁰⁾は、生産費によって決める。イギリス人にとっては、生産費にたいして競争が効用の代わりをし、セイにとっては、競争が生産費の代わりをする。価値とは、生産費と効用との関係である。価値

39) メガ原文では、Abstrakter Real- und Tauschwerth となっている (MEGA IV/2, S. 485.)。マルクスとエンゲルスの間で取り交わされた往復書簡のなかで、この当時、唯一「大綱」に言及しているのは、ただひとつである。すなわち、『独仏年誌』のなかで「大綱」が不人気だというエンゲルスの嘆きである。エンゲルスは、カーライルに関する自分の論文は大いに読まれているが、「経済学に関するものはほとんど読まれていない。当然だ」と述べている (MEGA III/1, S. 244)。この当時において、マルクス、エンゲルスが、「大綱」についてふれた書簡は、管見のかぎり、これだけである。だが、「大綱」の内容について、二人の間で、大いに議論がされていたことをうかがわせる内容ではある。

40) メガ編集部によると「ミル」は間違いで、「マカロック」が正しいとのことである。(MEGA IV/2, S. 785.)

の最初の適用は、総じて生産すべきかどうか、効用が生産費を償うかどうかという問題を解決することである。価値概念を実際に適用することは、生産について決定を下すことにかぎられる。現実価値と交換価値との相違は、商業にさいにあたえられる等価は等価ではないということにもとづく。価格は、生産費と競争との関係である。《以下、略》⁴¹⁾ (強調はマルクスによる。傍線は齊藤が施した)

以上のマルクスによる摘要に関して言えることは、概して二つである。第一に、マルクスは、エンゲルスの「大綱」を念頭に置きながら⁴²⁾、主要な経済学者の著作の抜き書きを行っているということである。第二に (これが重要なのだが)、マルクスは、「大綱」の摘要 (抜き書きではない) を作成するにあたって、経済学的カテゴリーに重点を置いているということである。それは、経済学的カテゴリーの部分に強調が施されていることでもわかる。マルクスが、エンゲルスの「大綱」に見出したものはこの点である。つまり、資本制生産を批判するにあたって、まずそのカテゴリーの批判 (吟味) から行わなければならないということである。

これについて、メガ編集部は次のように記している。

「このエンゲルスの著作は、ブルジョア政治経済学が抱いている表象と資本主義的生産様式のいくつかのより重要なカテゴリーをば、批判的に研究したところの結果であった。この研究は、エンゲルスがイギリス滞在中に着手されている。この関連から、エンゲルスは、ブルジョア経済学をば、根本から、弁証法的唯物論的な批判的研究を初めて行うことを決意したのだった」と。

また、「エンゲルスの作品にたいするマルクスの内容把握は相当な部分を網羅している。マルクスが目じたのは、スミスーリカードゥ学派の間の論争をば、価値の定義の解釈をめぐってエンゲルスが整理したこと、ならびに、私的所有、商業、競争、価格、地代、資本および労働といった経済学的諸カテゴリーのエンゲルスの分析であった」⁴³⁾とも述べている。

ここで「大綱」とそのマルクスによる把握についてメガ編集部が述べていることは、まさしく、本来の意味での批判 (Kritik) であり、経済学的諸カテゴリーの「吟味」のことと解して間違いないであろう。

41) MEGA IV/2, S.485.

42) マルクスがエンゲルスの「大綱」を勉強した痕跡とみられる [フリードリヒ・エンゲルスの論文「国民経済学批判大綱」の摘要] というテキストが存在する。これは MEW でいい習わされた一般的な呼称であって、マルクスはその [摘要] を、「『独仏年誌』におけるエンゲルス Engels in den deutsch-franzoesischen Jahrbuechern」(MEGA IV/2, S.485) と記している。それはいわゆる「パリ・ノート」と呼ばれるテキスト群のなかに存在している。マルクスは、「大綱」を学ぶにあたって、さまざまな経済学者の著作から抜き書きを行っている。たとえば、J.B.セいの『国民経済学概説』、フレデリック・スカルベク、アダム・スミス、リカードゥ、ジェームズ・ミル、ジョン・ラムジー・マカロック、その他である。これらの抜き書きをしながら、マルクスは「大綱」を読んでいる。(MEGA IV/2, S.301-551)。なお、セいの抜き書きが筆頭に存在している。セイからの抜き書きのなかにマルクスの評注があることからして、エンゲルス「大綱」の内容による影響のあざかっていることは山中隆次の指摘するところである。

43) MEGA IV/2, S.780.

第三章 結論

したがって私たちは次のように結論することができる。

第一に、マルクスの『資本論』においては、新しい哲学の境地が開かれている。それは、かの著作が新しい内容を含んでいるということではなく、古典派経済学とは違った別のカテゴリー編制をもっているということである。その意味で、マルクスは『資本論』において、『ドイツ・イデオロギー』とは別の哲学を採用していた⁴⁴⁾。そして、その採用は、明らかに意識的なものであった。

第二の結論は次のようなものである。「経済学批判」の方法へ、マルクスを最初に導いたのは、「国民経済学批判大綱」であり、エンゲルスであるということである。その意味で、マルクスの経済学批判の方法を論ずる限り、マルクスとエンゲルスとは、根本において一致している⁴⁵⁾。

そして第三に、もし『資本論』をもって、あるいは、カテゴリーを批判（吟味）して、諸カテゴリーの編制を組み替えることを、経済学（あるいは科学一般）の「(科学)革命」と呼ぶことが許されるならば、その「科学革命」の完成への道をマルクスに対して最初に拓いたのはエンゲルスである、といいうるのである。(以上)

(2009年10月1日受理)

44) 『資本論』における新しい哲学の境地が、マルクスにとって意識的に採用されたのは、「経済学批判への序言」の時点であるといえる。しかし、その時期の精密な考察は別稿に譲ることにする。

45) 大石高久「エンゲルス「国民経済学批判大綱」とパリ時代のマルクス（『拓殖大学論集』（64号）のなかで、「次の点が決定的に重要である」として結論を述べている。「即ち、マルクスにとって同時代人（ブルードン等）およびその先行者（スミス、リカードゥ、ヘーゲル）の中でエンゲルスこそが、彼の「国民経済学批判大綱」こそが、真の範疇批判への道を拓いたということである」と。この結論は完全に正しい。なお、降旗節夫は、「われわれの見るかぎり、エンゲルスがその経済学的研究の出発点で獲得し、生涯をかけて精緻化し、体系化した資本主義観は、マルクスの『資本論』の基本構造と著しい対照をなしている」と述べている（『エンゲルスと現代』御茶の水書房、1995年、p.138.）。問題なのは、「大綱」の内容およびその諸カテゴリーの羅列ではなく、それが古典派経済学の諸カテゴリーを吟味しているという方法なのである。内容が未熟で、カテゴリーの編制もまた未熟であることをもって「大綱」を批判するのは、その批判の仕方が間違っているのである。他方で、桜井毅は、対照的に次のように述べている。「私的所有と競争という視角ですべてを裁断するエンゲルスの手法には、例えば価値論の問題として扱うと、不十分なものは確かであるが、個々の経済学上の問題の認識より、その特徴は、あくまでも経済学の諸カテゴリーを資本主義の生産諸関係の理論的反映としてとらえたところにある。その鋭いカテゴリー批判の目は、当時の社会主義者の水準をはるかに超えて、そのままマルクスの経済学批判に繋がるものを感じさせる」（同書、p.168.）、と。この見方こそが正しいものと思える。